慶應義塾 醫学部新聞
発行所 三四会医学部新聞編集室
〒160-8582 東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線62596
会員については会費に含まれております
発行人 末舛惠一
毎月1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
診察時間 午前9時～午前11時
電話（3353）1211（大代表）

第9回 慶應医学賞授賞式挙行

受賞者Roger Y.Tsien教授の記念講演会に多数参加

第九回慶應医学賞授賞式式典が十一月二十九日午後四時北里講堂で挙行された。この日式場には主催側としての安西祐一郎塾長、審査委員長池田康夫教授はじめ、猿田享男、関場武常任理事、相川直樹病院長など、更に基金寄付者である故坂口光洋夫人坂口芳子さん、および来賓として文部科学省より塩谷立副大臣等、アメリカ大使館よりKevin Maher公使ら、更に学外審査委員の豊島久真男、御子柴克彦、浅島誠、阿部薫の諸氏、その他の関係者が出席していた。また、会場は、各科教室員や学生などの若い年代層を主とした参会者など総計二〇〇名を超える参会者で埋まっていた。なお今回から受賞は在来見られた臨床、基礎から一名ずつの形式と異なり、慶應を含め国内外から国際的に評価され、創造性に富む研究者一名に受賞されることになった。

北里講堂で行われた医学賞授賞式

式典は河上裕教授（内 59回）の司会により進行した。最初に池田康夫審査委員長（内 47回）から審査の経過と受賞者の紹介が行われた。安西塾長から受賞者の表彰が行われた。ついで、安西塾長が祝辞を述べたが、その内で坂口賞の由来に触れ、本賞授賞の目指すところを強調したが、基金設立に多大な貢献あったその坂口光洋博士が、二〇〇三年十二月十三日死去されたことを悼み、出席の芳子夫人の紹介を行った。更に審査が学内の委員の大変な努力と国外の協力により、本当に優れた内容ある審査結果を生んだことを高く評価し、またこの賞が二十一世紀の世界の医学研究を開拓する一助としての使命あることに言及し、今後の発展を祈念することを強調していた。

次に塩谷文部科学副大臣、Kevin Maher駐日アメリカ公使ら来賓の挨拶があって、記念講演会に移り、猿田常任理事の挨拶の後、受賞者Roger Y.Tsienによる講演は、豊富なスライドを用いてなされた。北里講堂における式典終了後、会場を新棟十一階オアシスに移し、受賞記念レセプションが行われた。

なお審査・選考は次の様な方法がとられている。

(1)医学ならびに医学に密接に関連した生命科学の諸分野において優れた業績を挙げ、現在でも活発な研究活動を行っている研究者について審査を行う。

(2)国内外の多数の有識者から推薦者を選び、候補者の推薦を依頼する。

(3)慶應医学賞審査委員会はこの推薦された候補者の研究業績等について審査し、数次の審査を経て授賞候補者を選定し、記念基金運営委員会に推挙する。

(4)記念基金運営委員会は最終授賞候補者を塾長に報告し、塾長はその報告に基づき、受賞者を決定する。

第9回慶應医学賞審査委員会審査委員

- 委員長　池田　康夫（慶應義塾大学医学部教授）
- 委　員　浅島　誠（東京大学大学院総合文化研究科研究科長）
- 阿部　薫（国立がんセンター名誉総長、横浜労災病院院長）
- 井村　裕夫（先端医療振興財団理事長、元京都大学総長）
- 岡野　栄之（慶應義塾大学医学部教授）
- 金澤　一郎（国立精神・神経センター総長）
- 河上　裕（慶應義塾大学医学部教授）
- 谷下　一夫（慶應義塾大学理工学部教授）
- 豊島久真男（理化学研究所遺伝子多型研究センター長）
- 御子柴克彦（東京大学医科学研究所教授）
- 吉村　泰典（慶應義塾大学医学部教授）

（50音順、敬称略）

審査委員長挨拶

池田　康夫

ご臨席の皆様、本日は第九回慶應医学賞授賞式にご出席頂き有り難うございました。

第九回慶應医学賞受賞者でありますCalifornia大学San Diego校Roger Tsien博士ご夫妻、文部科学副大臣塩谷立先生、駐日アメリカ大使館Kevin Maher公使、また、慶應義塾医学振興基金をご寄付頂いた坂口芳子様、これらの皆様のご臨席に厚く御礼申し上げます。

私、ただ今ご紹介頂きました本年度審査委員長の池田でございます。本年度の審査報告・受賞者の紹介をさせて頂く前に慶應義塾医学振興基金について一言触れさせて頂きます。

当基金は慶應義塾大学医学部をご卒業なさいました故坂口光洋先生と奥様の芳子様が、慶應義塾大学はもとより、広く国際的な視野に立って医学・生命科学の発展に役立てて欲しいというご意向で、一九九四年に五〇億円、続いて一九九九年に二〇億円と合計七〇億円の浄財を慶應義塾にご寄付下さいました。慶應義塾医学振興基金はこれによって設立された基金でございます。

当基金が行っている事業としては、医学国際交流事業・医学研究奨励事業などがありますが、医学賞の選定と授与は、本基金の中心的事業の一つであります。本日も坂口芳子様には授賞式にご臨席頂いております。（毎年授賞式にご臨席頂いていた坂口光洋先生が昨年十二月にご逝去されました。痛恨の極みであり、謹んでご冥福をお祈り致したいと思います。）

それでは、本年度の選考経過をご報告申し上げます。

これまで慶應医学賞は、優れた基礎医学・臨床医学の研究者を国外・国内より各一名ずつ顕彰して参りましたが、慶應医学賞が名実ともに国際賞として評価されるに至った事より、本年度より国内外を問わず一名の方を選出することと致しました。

本年度の慶應医学賞の審査は昨年末よりその準備を始めました。選考の基本方針を確認した後、二月中旬に二四カ国、約三〇〇〇名余りの学識経験者及び研究機関長などに候補者推薦のお願いを致しました。

その結果、世界各国から一一九件、一〇七名の優れた基礎医学・臨床医学の研究者をご推薦頂きました。この方々に加えて、過去に推薦された候補者から、本年度の対象者として相応しい十二名を合わせ、一一九名について、我々が出来る限りのデータの収集と四次に渉る審査を経て、八月三十日に最終審査委員会を行い、十二名の審査委員全員が一致してRoger Tsien博士を本年度の慶應医学賞受賞者として選出致しました。

この結果を安西祐一郎慶應義塾長を委員長と致します坂口光洋慶應義塾医学振興基金運営委員会に上申致し、更に慶應義塾常任理事会を経まして、本日の慶應医学賞授賞式を執り行う事になった次第でございます。

審査の経過について少し詳しくお話申し上げます。慶應医学賞選考の基本方針は、生命科学の研究に新展開をもたらした業績、または臨床医学の発展に対して多大な貢献をされた方を選定するというものです。本年度はそのうち生命科学、基礎医学の分野で新しいパラダイムをもたらす研究業績をあげ、更にこれから一層の発展が期待出来るような研究をしている方を一名選出するという方針を立てて頂きました。

審査には、慶應医学賞が国際賞であるという考え方から、多くの学外の方に参加して頂いております。

審査は、推薦された候補者全員についての推薦理由書等の資料を学内委員六名で検討した後、九〇名の候補者について、十分な見識を有する学外専門委員五一名、学内専門委員十一名、合計六二名の先生方に評点をお願いしました。その評点をもとに十四名を選出し、更にこの十四名について詳細なデータをまとめ、最終審査委員会資料として、医学・生命科学への貢献度はもちろんの事、今後も研究の発展が期待出来るかなどを中心に、徹底的な議論を行い、受賞者を決定した訳でございます。

それではここで簡単に受賞者の紹介をさせて頂きます。

Tsien博士は現在California大学San Diego校教授をなさっています。一九五二年のお生まれで、現在五十二歳です。一九七七年Cambridge大学において、生理学でPhDを取得されています。その後、California大学Berkeley校に移られ一九八九年よりCalifornia大学San Diego校Department of Pharmacology&Chemistryの教授になられ、Howard Hughes Medical Instituteで研究を続けておられます。

Tsien博士の世界をリードする研究は言うまでもなく「生きた細胞内のシグナル伝達の可視化と計測技術の開発」です。細胞が生きた状態のままで細胞内のカルシウムイオンやCyclic AMPのようなシグナル伝達分子の動態をリアルタイムで可視化、定量化する事に成功しました。

また、メッセンジャー分子のCaged化合物や膜透過性化合物の設計を行い、カルシウムイオン、ナトリウムイオン、一酸化窒素、膜電位、核外輸送、遺伝子の転写反応の動態の生理的意義についての解析手段を多くの研究者に提供して来ました。Tsien博士の研究は細胞生物学と有機化学研究の境界領域を極めるものとして、今後、疾患の病態解明の研究、創薬研究に多大な影響を与えるものと高い評価を受けておられます。

Tsien博士のような素晴らしい研究成果をあげられた方に慶應医学賞を差し上げることが出来まして医学振興基金並びに医学賞審査委員会は心より嬉しくまた名誉に思っております。

この度のTsien博士の受賞が慶應義塾のみならず日本の医学研究者に良い刺激となり、第二、第三のTsien博士を生み出してくれますことを心から願っております。

以上、第九回慶應医学賞審査報告を申し上げました。

（教授　内 47回）

JAPAN TIMS NOV29に発表の慶應医学賞

受章研究テーマ

生きた細胞内のシグナル伝達の可視化と計測技術の開発

Roger Y.Tsien

Investigator, Howard Hughes Medical Institute
Professor, Departments of Pharmacology and Chemistry & Biochemistry,
University of California, San Diego

細胞が生きた状態で、特定の分子群の動態やそれらの間の相互作用を可視化することは、生命体の発生、細胞生理学や病的状態を理解する上で必須なものとなってきている。Tsien博士は、独創的な技術革新により、生細胞内のカルシウムイオンや環状AMPのような細胞内のメッセンジャー分子の動態のリアルタイムの可視化と定量方法と、それを可能にするレポーター分子の設計に成功してきている。また、メッセンジャー分子のcaged化合物や膜透過性化合物の設計を行い、カルシウムイオン、ナトリウムイオン、一酸化窒素、イノシトールポリリン酸、膜電位、核外輸送、遺伝子の転写反応の動態の生理的な意義についての魅力的な解析手段を多くの研究者へ提供してきた。Tsien博士の開発してきたシグナル伝達を可視化するレポーター分子は、創薬におけるハイスループットスクリーニングを著しく簡便なものにしている。このようにTsien博士の研究は、有機化学研究と細胞生物学の境界領域を極めるものであり、今後の疾患研究への恩恵も計り知れないものがある。

Tsien博士

論壇

医師の良心を問う
―ある合併症のはなし―

深沢　俊夫

最近、「Complications」を「合併症」と訳した医者は"天才"だとつくづく思うことがある。患者にしてみると、この訳語は患者側の要因によるものはもちろんのこと、医師の過誤や不手際によるものも、すべてをひっくるめて「あなたの病気がこじれたのは自然の成り行きですよ、運が悪かったと諦めなさい」と響く。いや、悪いことはすべて患者のせいにしてしまうつもりでこの訳語を考えたのではないかと勘ぐりたくもなる。

今から数年前私のごく近い親類の女性（七〇歳代）が直腸がんで、ある地方の公立病院に入院し直腸と共にがんを摘出し人工肛門を造成する手術を受けた。術後一週間ほどして激しい腹痛と高熱に見舞われた。担当医師から「看護師の眼を盗んでアイスクリームでも食べたのでしょう」と言われたという（ただし患者は否定している）。症状は数日で治まったが、その後さらに一週間ほどして今度は左の足首が腫れて激しい痛みを訴えた。私が見舞いに行ったのはちょうどその頃である。関節の腫れと前後して、悪寒、戦慄を伴う高熱が出ていた。発熱はほぼ二十四時間周期、敗血症もしくは菌血症が疑われて当然である。ところが、抗生剤を注射に来た担当医は、居合わせた私に「採血しても菌を検出することが出来ないので、リュウマチ性の関節炎と考えられます」と言う。患者にはリュウマチの既往はない。帰宅後、私はまず大学の後輩で大腸がんの専門家に電話で経過を話し意見を求めた。驚いたことに彼は担当医の診断に対するわたしの疑いをまったく受け入れようとはしない。それどころか、むしろ「素人が何を言うか」といわんばかりの反応である。失望して今度は同級生で親友の食道外科医某に電話し、患者が入院している病院の名を告げた。偶然にもその院長は消化器外科学会で昵懇にしているそうで、すぐに実情を聞いてもらった。真相は直ちに明らかになった。術後の腹痛、発熱は腹膜炎だったそうである。従って、その後の関節炎と発熱は腹膜炎に由来して左足関節に出来た細菌のフォーカスから周期的に菌が全身に放出されて起こったに違いない。数日後、患者に電話をして様子を聞くと、私が帰った後、足関節の切開手術を受け、症状は落ち着いたという。約三ヶ月で患者は退院、直腸がんは完治したが、数年経った今でも足関節炎の後遺症で杖をついてやっと歩いている。

以上から読者はどんな感想を持っただろうか。私は三つの点を指摘したい。第一に、なぜ担当医たちは術後腹膜炎を患者に隠そうとしたのだろうか。自らの手術もしくは術後管理の不手際を知られたくないのは人情としてよく分かる。しかし、一旦患者に「うそ」をつくと、さらに新たな「うそ」をつかねばならなくなる。医師が患者に真実を告げないでなんで患者の信頼を得ることが出来ようか。退院時、医師たちは「実はMRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）による感染でした」と患者に言ったそうである。「不可抗力だった」とでも言いたかったのだろうが、そんな言葉を今更だれが信じようか。次に、私が最初に意見を求めた大腸外科の専門家の反応である。彼の専門家としての（担当医に対する）身内意識が上記のような反応になったのだろうが、科学者としてはあまりにも情けない。第三に、院長の態度である。患者に嘘を言っても（言わせても）、親しい仲間の医師にはほんとうのことを告白する。まさに閉鎖社会の"悪"を端的に示している。

蛇足だが、昔の細菌学者からいまどきの医師たちに言いたい。抗生物質を大量に投与している患者材料から細菌を検出するのは「至難の業」であるということを。採血した血液を病室からまっすぐ検査室に運んで、直ちに培養するなどということは、検査会社が栄える現在では夢物語になったが、患者血液から菌が検出できないからというだけでかりそめにも菌血症ではないなどとは言わないで欲しい。

（名誉教授　微 33回）

三四会定例理事会
―平成16年11月19日―

報告事項

一、九月二十五日渋谷支部例会。会長出席
二、十月二日　三四会全国支部長会。本紙十月号既報
三、十月十四日栃木県三四会総会。理事一名参加
四、十月三十日第七四回生涯教育研究セミナー
五、十一月十二日慶應医学会総会。会長出席、三四会奨励賞十名に授与
六、十一月十三日玉川支部懇親会。副会長出席
七、新宿三四会総会　副会長一名出席
八、海外研究者との交流（旧留学生を励ます会）を一月十九日午後六時からオアシスにて実施予定
九、将来計画検討委員会で三四会支部のあり方を検討したが、今後引続き検討することを継続する（後述）
十、医学部学生支援委員会として経済的支援を実施する方向で検討が進められており三四会としての協力のあり方を検討

審議事項

一、三四会支部構造検討委員会を開設し在来の三四会支部が会員の意向に対する適否を検討することを承認。
二、出産育児支援を目的とした基金設立を検討する委員会開設について承認。
三、恒例の四谷祭協賛を本年も行うことを承認し学生側に予算表の提出を求めることにする。
四、来年度の名簿発行にあたり記入要領について会員の意向をアンケートにより求めプライバシーの侵害なき様にし将来のIT化に備えることとする。
五、来年は役員改選の年にあたるので一月にその旨公示する。その際改正された会則で実施することを確認。
六、医学部新聞は学内外会員にその存在が確定し発行も順調に進んでいるので更に紙面内容を会員の意向にマッチし充実したものとするため、総務と広報委員による広報連絡協議会を設け新聞編集の基本方向を決定する提案を認める。

窓標

信濃町活性化への期待

今年は各方面に変動が見られているが、ここ信濃町でも学部、病院の運営面に変革が行われていたし、三四会でも会則の改訂が施行となった。特記すべきは大学病院の運営機構が昨年秋には学部とは別枠で設けられたが今年発表された経営改善には著しいものがある。

大学病院は創立以来既に一世紀半近く経過したが、学部の一部門としての存在に変更はなかった。しかしここ数年来病院経営状態がきびしさを増すに及びその対策が問題視される様になったが、昨秋以降塾執行部の指令により「病院経営ボード」による病院運営が施行された結果今年はV字型の経営改善が実現しそうである。積年の赤字経営が急速に改善を来した根拠は何であったろうか。無視出来ぬものに病院職員の間に危機意識が普遍化していた事実はあるものの直接の引金役を果したのは経営ボードの執行施策にあったし組織の各部門における担当者の活動にあった様だ。

世間一般においてその創立当時には高い目標と有能な職員によるハイレベルの運営がなされている組織体制の企業においても、時の経過、世代の交代に伴い創立時の目標は形骸化し、有力な関係者とのしがらみが人事管理の混乱を招き、各部門における見えざる利害関係の集積などが次第に組織運営に制動的な効果を生む場合が少なくない。その状態の継続が何を生むかは火を見るよりも明らかな所である。

凋落と衰微に陥った組織の蘇生法としては、創立当時の目的意識の賦活をはかり、宿弊を絶つ勇気をもって現状と対決する姿勢を堅持することが大切であろう。その決意の下に執行体制を確立するに際しては、利害関係を超越した而も保身を織り込まず応用能力を発揮出来る人事構成による組織再編に成功した場合において組織、企業体は再生して行く。信濃町の今年の著しい改善の根本にも同様の経過があったと考えられるが、特に人材発掘とその招致を実現した塾執行部の決断は評価に値する。

明年以降、病棟再建問題も解決を迫られる時を迎えるであろうことを思う時、リフレッシュした流れの強化を期待したい。

（P）

助講会緊急寄付
新潟県中越地震への義損金

助教授講師会（会員数三九人）は、「医学部、義塾、さらに社会の活性化を図るために余剰金を活用する社会活動」を開始しました。通例では、まず会員からアイデアを募り、幹事会が候補を絞り、その後に会員投票で一〇〇万円一件の支援対象を決定します。本年はアイデアを募集中に新潟県中越地震が発生し、多くの方が被災されました。

多数の会員から「新潟県中越地震への義捐金」が提案されました。対応には迅速性が必要なため、異例ですが危機管理の手法を用いました。

「緊急に、新潟県中越地震への義捐金として一〇〇万円を、新潟県三四会を通じて被災地に寄付することを提案します。寄付対象として、日赤など公的機関に委託する方法もありますが、新潟県には三四会員が二〇人以上おられ、小千谷など被災地の現場で救護活動に活躍しておられます。そこで、新潟県三四会を通じて寄付を行い、寄付金の使途に関して、医学部新聞に報告いただくことを条件とします」とe-mailで会員に連絡したところ、二十四時間以内に過半数七〇人の会員から全員賛成の投票を戴きました。

中越地震が直撃した小千谷市には、新潟県三四会評議員である北村雄航先生（36回）がおられます。北村先生に一〇〇万円をお送り申し上げました。猛烈な忙しさで勤務する助教授講師会のメンバーが、二十四時間以内に反応したことは、重ねて誠に異例であることを申し添えます。この異例の試みは実験的ですらありましたが、慶應医学の中に福澤先生の精神が残っていることを実感いたしました。

（提供　助教授講師会・会長　堀進悟　救急 54回）

林田健太郎君
米国心臓病学会最優秀研究賞を受賞

二〇〇四年十一月六～十日にかけて米国ルイジアナ州ニューオリンズで開催された米国心臓病学会において、同君は肺循環部門の最優秀研究賞を受賞した。同学会は世界各国から約五万名が参加する心臓病学会のなかでは世界最大のもので約三八〇〇の演題が発表された。同賞はこれまで米国の研究者が受賞することが多く、慶應からの受賞は初めてであり、おそらく日本からの発表が受賞したのも初めてではないかと思われる。同君の研究内容は肺高血圧症の成立機転に関するもので、同疾患の成立過程において骨髄の多能性幹細胞が深く関与することを示したものである。同君らはGFP強発現マウスの骨髄細胞を致死量の放射線を照射した同種マウスに骨髄移植を行い、キメラマウスを作成した。そして、一〇％O_2の低酸素下で長期間飼育し、実験的に肺高血圧症を作成した。肺高血圧マウスの肺血管、肺間質を観察すると多数のGFP陽性細胞が骨髄から移動し、肺血管のリモデリングに骨髄細胞が深く関与することを初めて示したものである。授賞式では選考委員長から本疾患の成立機転の解明に大きく貢献した旨の賞賛の言葉を戴いた。呼吸循環器内科は故笹本浩教授以来肺高血圧症を得意の疾患としてきた。新たに分子生物学研究手法を取り入れた林田君の活躍でその歴史にまた一つ花を添えたといえるであろう。

（提供　福田恵一 62回）

第17回慶應産業保健研究会

慶應医師会との共催で行います。日本医師会認定産業医生涯研修に認定されています。1単位取得できますので、ふるってご参加下さい。

1. 日時　平成17年2月25日(金)(受付PM5：30～)
   研究会　PM6：00～7：00
   懇親会　PM7：00～8：30
2. 会場　研究会　慶應義塾大学病院　新棟11F　中会議室
   懇親会「オアシス」
3. 当日会費　産業医認定単位希望者
   研究会会員：1,000円　慶應医師会員：1,500円
   懇親会費：5,000円
4. テーマ　講演「産業医が知っておくべきめまいと難聴」
   講師　慶應義塾大学医学部　耳鼻咽喉科
   教授　小川　郁先生
5. その他　①参加希望の方は、下記事務局までお申し込み下さい。
   申込期限　平成17年2月10日(木)
   ＊　上記期限に関わらず、定員となり次第申込を締め切ります。
   ②日本医師会認定産業医：生涯研修　専門1単位

慶應医師会
慶應産業保健研究会事務局
K．K．ヒューマン・リサーチ内
東京都新宿区若葉2－5－16　向井ビル3F
TEL03-3358-4001　FAX03-3358-4002
（担当　安藤）

ご案内

新年祝賀式の開催について

医学部長　北島　政樹

新年の祝賀式を左記により開催いたし、教職員・三四会員各位の交歓・親睦を一層深めたく存じます。いろいろご予定もおありのことと存じますが、万障お繰り合わせのうえ出席いただきたく、ここにご案内いたします。なお、本祝賀式と併せ「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金」に基づく医学研究奨励受託者の発表・同研究助成金の贈呈式を同時に執り行います。

記

日時　平成十七年一月五日（水）十三時から
場所　新棟十一階　大会議室

慶應義塾大学病院 年末年始の休診

12月30日(木)より1月4日(火)の間休診と致します

病院長